

新春市長対談

郡和子

ロバートキャンベル

笑顔交わる、共創の環

せんだいメディアテーク館長・ロバート・キャンベル氏をゲストにお迎えし、アートの持つ可能性やこれからのメディアテークなどについて、郡市長と語り合っていました。

会場＝せんだいメディアテーク



ロバート キャンベル氏
ニューヨーク市生まれ。日本文学研究者。専門は近世・近代日本文学。東京大学名誉教授。2025年4月にせんだいメディアテーク館長就任

しいまちだなど思いました。
市長 昨年の6月に行われた初の館長イベント「ずんだと牛タンーぼくに仙台のことを教えてくださーい！」は、皆さんに館長自身のことを知ってもらうだけでなく、館長も仙台について教えてもらうという内容でしたね。
館長 この素晴らしい施設でスタッフと一緒に何かをつくっていくためには、私も仙台について学ばないといけません。ですから、「仙台を知らない人に説明するのに一番適切なものを持ってきてください」と事前にお題を出して、4組のゲストに仙台について語ってもらいました。広瀬川のさまざまな場所で採取した水とそれぞれ場所でのストーリーを紹介してくれたり、別の方は祖父の時代から集めている広瀬川の石を持ってきてくれたりしました。記憶、歴史、自然、風景というものが結び合っていて、それがまちの力にな



▲定禅寺通エリアから資源循環の取り組みを発信する「JOZENJI STREET CIRCULAR PROJECT」の一環で開発されたJSCタンブラーを紹介する市長

っているのだと感じましたね。
市長 広瀬川は市民の皆さんが愛し、守っている自然の一つでもあるので、いろんな思いがそこにあるんだろうと思います。今日は、私だったら仙台を紹介するのに何を持って行くか考えて、定禅寺通のケヤキの剪定枝などを使って作られたタンブラーとガンザ（振って音を出す打楽器）を持ってきました。剪定枝をこみとして捨てずに再利用し、ループ（循環）させていくために、民間事業者の方々の手も借りながら作られたものなんです。
館長 これはすてきですね！「ループ」。パワーワードを市長から頂いた気がします。メディアテークもお互いにつながり合えるよう

なループをつくっていくことが大切だと感じています。
支え合い、つながる心
市長 仙台のまちは東日本大震災による甚大な被害から復興を遂げてきましたが、その震災から間もなく15年になります。当時を振り返って特に印象に残っていることはありますか。
館長 地震発生時は東京でテレビ番組の収録をしていたのですが、スタジオが船底のように揺れて。その後、番組のプロデューサーが持っていたテレビで津波の映像を見て、あつけにとられたことを記憶しています。その夜に歩いて帰宅する途中、公衆電話の列に並びました。そこでは石巻出身の女性が電話で家族や周りの人の安否を確認していたんですが、硬貨をたくさん入れないとすぐに切れてしまふ。すると誰も何も言わずに、列の後ろの方からピストン式に小さな山ができていたんです。日本だと公共空間で知らない人にあまり声をかけないですが、いざという時はそれぞれが考えて行動して、それが大きな力になっていく。安心心というのは育てていくもの、つくっていくものだと感じました。
市長 何か自分にもできることが

館長に就任して
市長 あけましておめでとうございます。キャンベルさんは、日本で40年間日本文学を研究し、東京大学名誉教授など数々の要職を務められており、昨年の4月からは、せんだいメディアテークの館長に就任いただいています。仙台の生涯学習や文化活動に大きなお力を貸していただけているということで、とてもうれしく思っています。就任前から何度も仙台にお越しいただいていることですが、まずは仙台の印象について教えてくださいませんか。
館長 私は20代の頃に研究生として九州大学に留学し、その後国文学・国文学研究室の専任講師として採用されたのですが、調査で狩野文庫や漱石文庫がある東北大学へ行くために何度も仙台に足を運びました。当時は、東北新幹線が開通するかしないかという時代で、本当に長い時間をかけて来ていたんです。仙台の空気はとても清冽で、人々は温かいなど。東北の人たちはすごく口数が少ないですが、ちょっとしたきっかけがあれば、話し好きというか、温かいということがだんだん分かっていきました。食べ物もおいしいし、山も海も川もあって、世界でもすごく珍

ないか、という内側から湧いてくる気持ちが行動につながり、安心安全がつけられるのかもしれない。震災後、鳴子温泉に避難されている方を対象に、読書会を開かれていますね。
館長 私の友人が鳴子温泉で湯治場を営んでいて、そこが二次避難所になったのですが、部屋から出てこない方がいらっしやっただけです。そこで実際に被災地を歩いたり、避難所でお話を伺ったりして何ができるかを考え、読書会の活動を始めました。
市長 読書会を通して、被災された方々にはどのような変化があったのでしょうか。
館長 性別や職業、年齢関係なく集まって、一緒に小説などについて語り合ったり朗読し合ったりしていたのですが、普段あまり関わりがない方たちとの間で会話が生まれ、笑いも起きるようになりました。活動を始めて3回目くらいからは泣き出す方がいたんです。おそらく自分の経験や記憶が物語と重なるんですね。少しずつほぐれていくというか、何かがとる感じがありました。令和5年に、ウクライナの避難者の声を基に制作された証言集「戦争語彙集」を日本語に翻訳するため、ウクライナを訪れたのですが、避難者たちの



とおっしゃっていました。市民の皆さんにとって、メディアアーツがどのような場所でありたいとお考えですか。

館長 よくメディアアーツは建物が素晴らしいと言っていたのですが、中では何をやっていくか、が実はあまり知られていないと感じており、ここでどういけることができるかを広めないといけないと思っています。1階から7階までミルフィーユのようにいろんな人たちがそれぞれの能力や好奇心、課題、悩みを持ち込んで、混ざっている状態というのは日本の他の公共施設にないものです。そこを一つの足場にして、笑顔が少しでも増えるような場にしていきたいです。私たちが暮らしている社会の中の課題を、それぞれの立場で解決できる、和らげていけるようなきっかけを、アーツやメディアを使って市民の皆さんと一緒につ

くつていきたい。発信ではなく、発信、共創していく場として強めていきたいと考えています。

市長 なるほど。そうした場にしていくためには、仕掛けも大切になってくると感じます。

館長 そうですね。昨年の10月には、メディアアーツで18歳以下の方が自由に漫画を読める「マンガテーク」という企画を行いました。今、日本では、不登校の小・中学生が約35万人、高校生が7万人近くいて、中でも宮城県は不登校生が多い地域なんです。こどもたちがこどもらしく、自由と好奇心を持って過ごせるような場をつくることも、仕掛けの一つではないかと考えています。ほかに、メディアアーツの利用者や活動を地域とつないで、ラジオ番組を作っ

ていきたいと思っています。

市長 メディアアーツだからこそできることがあると思います。館長ならではの企画も楽しみです。本市では、「世界から選ばれるまち」を目指して、青葉山エリアや勾当台・定禅寺通エリアの再整備を進めるなど、地域の魅力創出に向けた取り組みを加速しています。それは市民の皆さんが笑顔になれるような暮らしがあつてのことです。メディアアーツでも、笑顔が増えるような取り組みがさら

アトリエで創作活動をしているのが非常に印象的でした。

館長 対面での教育ができない中で、絵画教室の先生が自分のアトリエを開放して、こどもたちがいつでも来られるような空間をつくっているんです。今、社会において自分の力を試したり大人にもまわたりといった学習機会が減っている中で、こどもたちが描いた絵を町の中に飾って、何かを作ったことを世界に問いかけることをしています。

市長 アーツがこどもたちの支えになっているんですね。

館長 それだけでなく、アーツはリハビリの中で非常に大きな役割を果たしていることが分かってきました。比較的安定しているリヴィウという町では、傷ついた人たちを受け入れて、アトセラピーなど



に展開されていくのかなと思うととてもワクワクします。

館長 メディアアーツが開館してからの25年で仙台のまちは大きく変わっていると思います。これからはもっと短いスパンで変化します。定禅寺通もそうですし、令和6年には東北大学が国際卓越研究大学第1号に認定され、外国人留学生を含めて多くの方が来仙します。ですから、仙台の大学や社会的な活動を行っている機関、企業、それからものづくりに関わっている方などの力を得ながら、仙台と世界が直結するように、私たちもパワーアップしないといけないですね。今のメディアアーツで安住するのではなく、各階で学生や高齢の方や外国人がそれぞれ行っている活動をつなげて面白いことをつくったり、生涯学習のヒントになるようなことをやりたい。仕掛けをつくっていききたい。と

市長 ありがとうございます。最後に市民の皆さんにメッセージをお願いします。

館長 まずは皆さんにメディアアーツに足を運んでいただきたいです。ふらっと来ていただいたり、あるいは事前にどういことが楽しめるのか、どういう人と出会えるのかを調べて来ていただいたり。そして、感じたことを伝えていた



ストーリーや、絶望に近い状況の中でお互い手を差し伸べ合っている姿が、3・11の際に被災者の方々とお話しした時と重なりました。

市長 厳しい状況の中でも、思いや言葉で人はつながることができると、こうしたこと共有できる場が必要なんですね。

アートの持つ力

市長 メディアアーツではアーツの側面から災害を考える企画も行われているように、災害時においては、アーツも大きな役割を果たしているのでは、と感じています。

館長 令和6年能登半島地震で被災した石川県能美市で、障害のある方の就労支援を行う会社を設立した友人がいるのですが、その方が地震で壊れてしまった大量の九谷焼陶磁器片をととても大切なものじゃないかと考え、廃棄せずに金

継ぎや呼び継ぎという手法でつなぎ合わせて再生させているんです。自ら何かを作り出すことが人々の力になるというところは、東日本大震災の時に思っていたことですが、改めてそう感じました。

市長 素晴らしい取り組みですね。館長は昨年の8月にもウクライナに行かれていますね。

館長 はい。ウクライナは3年以上の間、空襲警報が常に鳴っているような空間で人々が生活をして、学んで、生まれて、亡くなっている。そのような中で、文化芸術にどのような力があるかを調査するためにに行きました。演劇が大変盛んで、新作が上演されると、老若男女を問わず、たちどころに満席になるんですね。人が集まると標的にされてしまうので危険なことなんです。それでもみんなと一緒に何かを聞く、見届ける。そのこと自体が心のシェルターになっているんだと思います。まさに嗚呼で経験したことが思い出されました。

市長 現地での様子はSNSでも伝えてくださっていますが、大変な状況の中でもこどもたちが地下の



▲(写真左、中央) 令和6年1月に発生した能登半島地震により割れた陶器で作られた呼び継ぎの皿(株式会社C&C制作)と箸置き(写真右) 戦禍にあるウクライナで割れたコップ

を通して心のケアも行っている。「アンブローケン」という名の治療施設なのですが、「傷ついても壊れていない」という、まさに金継ぎや呼び継ぎのような精神で傷を隠さずに、傷があるものとして社会の中で共にみんなで生きようとしているわけですね。今回、能美市で作っている呼び継ぎの皿と箸置きをウクライナに持って行って、病院や美術館の方などにお渡ししたら、話の途中でも状況を理解し、感動されていたんです。今度はウクライナで割れた器を能登の技術を使って再生して返し、持続的な交流をつくっていききたいのと、ここメディアアーツで仙台市民の皆さんにも見ていただけるようにしたいと考えています。

市長 とても素晴らしいものを見せていただき、涙が出ました。東日本大震災後、仙台でも音楽や文学、アーツなどの文化芸術活動が行われ、被災された方々の心の復興に大きな役割を果たしてきました。改めて、アーツが持つ力の可能性の大きさを実感しています。

笑顔あふれるまちへ

市長 メディアアーツは1月で開館から25周年を迎えます。初の館長イベントの際に、メディアアーツについて「世界最高の公民館」